

糸乗 貞喜

(よかネットNO.2 1993.3)

日本の豊かさは何によって生まれたか
現在の日本が、世界で最も豊かな国の一つであることは異論のないところであろう。もし、そのことにいろいろ注釈をつける人がいるとしてもこの100余年の間に最も早いスピードで豊かになったことを認めない人はいないと思う。その理由について、私は次のように考える。

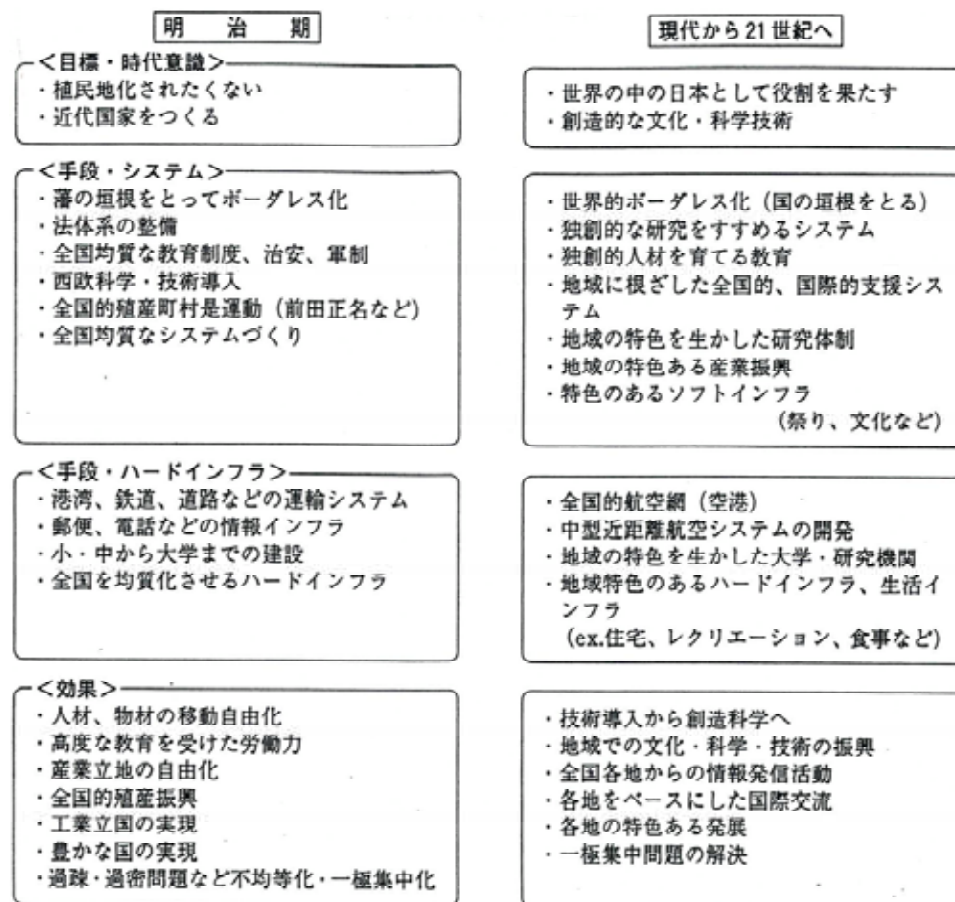
それは、少なくとも指導層の間では、日本が植民地にされてはならないという意志の共有があり、早く近代化して富国強兵を図ろうとしていた（思想の共有）、その上でとりかかった仕事は、法律・国民教育制度をはじめとする各種制度、治安、軍制などを整えた（ソフトなインフラストラ

クチャーを整えた）、その制度によって、ハードインフラを作っていた（港湾道路、郵便など）、そして勤勉に働き工業社会を作り上げ、物的豊かさを築いた、ということである。

知的インフラづくりを考える

それをまとめると下図のようになる。図で示しているように、明治期以降われわれの祖先は、飢饉や恐慌などで食べる物も不足する時、「わが子を売る」というような話のある中で、多くのインフラ整備をしてきた。

そして全国均質なインフラができる中で、近代化、産業振興のための、大変な努力によって豊かな日本が築かれた。その上にわれわれが今暮して



明治と現在のインフラストラクチャーの比較

いる。大変な苦勞が待ちかまえることを承知の上で移民のために先達が通った海路を、われわれは飛行機でレジャーを過ごすために越えていく。遊ぶことは悪いことではないが、それを肥やしにして、次の世代のために役立つインフラを準備しなければならない。

またそのため、目標を創造性豊かな日本をつくることに置き、ソフトな手段としての多様なシステムをつくり、ハードな手段としての研究施設・教育施設などをつくり、多様な日本、世界と手をつなぐ日本をつくらねばならない。

その基礎となるのが、知的インフラ（自主的な判断で活動するボランティア型の知恵の増殖作用が起こりやすい状況）である。

つまり、都市機能、住宅及びその環境、遊びなどの消費活動も含めて、独創性を育てやすい、知的活動のしやすい、知恵の交流のしやすい風土であり、21世紀の都市・地域づくりは、このことによって決まることになるだろう。